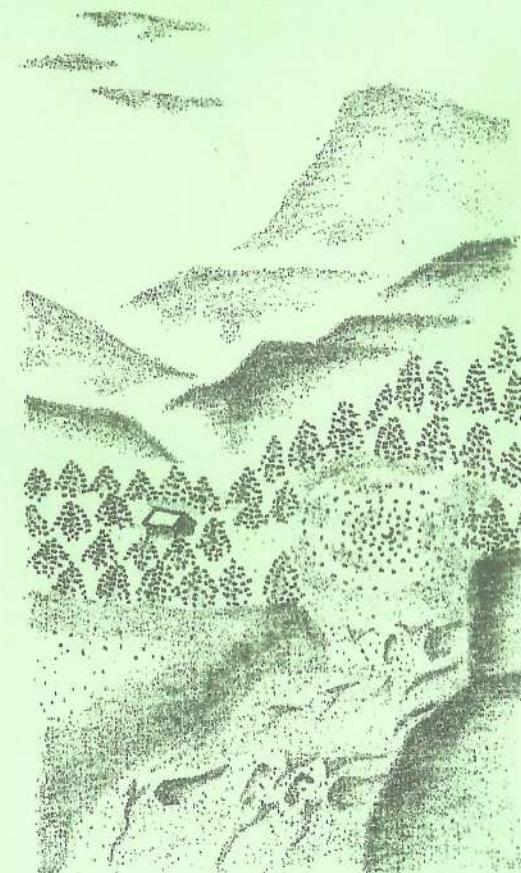


湧水 第十号 令和元年五月 発行

# 湧水



千代田岳精会 自作自詠俳句研修会

## 湧水第十号 目次

### 作者俳号

### 名 頁

|        |       |    |
|--------|-------|----|
| 伊藤しよう  | (彰一)  | 1  |
| 鶴飼てるお  | (輝夫)  | 2  |
| 神田つねこ  | (恒子)  | 3  |
| 菊地龍駿   | (利廣)  | 4  |
| 近藤まき   | (まき子) | 5  |
| 座間宗萌   | (文子)  | 6  |
| 塩月凌司   | (崇史)  | 7  |
| (重成)   |       | 8  |
| 鈴木陵人   |       |    |
| 徳本じゅんじ | (順治)  | 1  |
| 橋本千舟   | (隆一)  | 2  |
| 八田玄猷   | (豊)   | 3  |
| 藤原壽    | (壽子)  | 4  |
| 細川をさむ  | (修)   | 5  |
| 前田道人   | (道紀)  | 6  |
| 磯田鳥城   | (貞二)  | 7  |
| 岩崎泰俊   | (泰俊)  | 8  |
|        |       | 9  |
|        |       | 10 |
|        |       | 11 |
|        |       | 12 |
|        |       | 13 |
|        |       | 14 |
|        |       | 15 |
|        |       | 16 |

隨筆

伊藤しよう

「平成の終わりに」　伊藤しょう（彰一）

紋白蝶我がふるさとを思ひ出す  
群れなして川面に影の鯉のぼり  
日傘さす後姿のしやなりかな  
窓開けて葉擦れの音や涼新た  
鉄路沿ひ白きすすきの甲州路  
野分過ぎ大木避けて倒るまま  
落葉して錦織りなす石畳

首すくめ床屋帰りの冬帽子

「蟬しぐれ」　鶴飼てるお（輝夫）

寺の庭三桜の花見つけたり  
崩れてはかたまり流る花筏  
あぢさゐや七変化して幕下ろす  
少年のまま逝きし子や蟬しぐれ  
夕暮れて頬なでし風涼新た  
山は暮れ湖畔静もり芒原  
足元にどんぐりふたつバスを待つ  
冬帽子ジョギナーの背に夕日追ひ

「桑の実」

神田つねこ（恒子）

街灯のともるバス停余寒かな  
花辛夷雪に色香の失せにけり  
校庭にはじける声や黄蝶舞ふ  
山峡の村にはためく鯉幟

水を張る谷地田に群るる螢かな  
桑の実を幾つ食つたと子の自慢  
ベランダに色のあふるる松葉牡丹  
初紅葉三宝寺池に人集ふ

「元朝の」

菊地龍駿（利廣）

元朝の盆清しおみきかな  
福は内近所氣遣ふ声でまき  
春灯和服姿に吟冴えて  
雜踏の街に息吹や春の色  
白日傘歩調あはせて母子かな  
盆東風や吟詠競ふ温習会  
すゝき野や藏王連峰夕映えす  
街路樹の剪定細り冬めけり

「恋螢」

近藤まき（まき子）

帰路急ぐ靴音固き余寒かな  
卒業子見守り隊に花渡す

癖字とは個性とほざき入学す  
初蝶や動態視力ためさるる  
恋螢点字でつづるラブレター

新涼の竹林風に縞模様

検査待つ少女の赤い冬帽子  
歩道橋の手すり光るや枯木立

「鬼やんま」

座間宗萌（文子）

路地裏の出合ひと別れ猫の恋

山寺の羅漢破顔や春うらら

句会へと足取り軽き日傘かな

境内に神の使ひか鬼やんま

河骨の色は黄金と輝けり

茶の花の蕊あらはにて光りをり

デパートの装ひ新た冬めける

焼芋のしこみ屋台の赤ちやうちん

「夢幻」

塩月凌司（崇史）

初空やはるか彼方の白き富士  
妻不在ふと見る窓に春の雪  
ほろ酔ひの詩吟となりし春の宵  
鯉幟ゲリラ豪雨に力つき

漆黒の水面螢火夢幻かな

石神井の古刹並びて秋暮るる  
椅子並べ老ひの会話や文化の日  
冬帽子買つてはみたが壁飾り

「生きとし生ける」 鈴木陵人（重成）

春待つや老ひの二文字脇へ遣り  
春惜しむ啄木の詩吟じけり  
児等の声紋白の翅煽ぎけり  
おい君よいくつになつた鯉幟  
遠き日の甘き香りや螢狩  
稚胸に母颯爽と日傘かな  
秋涼し読経の声も澄みにけり  
一本と雖も芒風のあり

「街中」

徳本じゅんじ（順治）

街中に余寒のありて喫茶店  
春寒を残して多摩の疾風かな

木蓮の盛りに思ふ里の墓

温たかき母の背中や螢狩

新涼や齡を忘る足はこび  
阿波おどり踊り続けて八十路かな  
流れゆく見慣れし車窓冬めきて  
お茶会や集うママ友冬帽子

「縦光り」

橋本千舟（隆一）

堂屋根の雪解零に律のあり  
永き日や遠富士望む観覧車  
靈山とて立入り禁止滴れり  
収穫や母の味なる青トマト  
いなづまの縦光りして日照雨止む  
背のびして葉を梳く庭師松手入  
小春日や搾乳小屋へと牛の列  
浜小屋に魚曆下げ春を待つ

「香氣のことば」 八田玄鶴（豊）

初春に「香氣」のことば何想ふ  
我が血筋播磨に残る初節句  
五月雨の言葉に背き街水没  
鉄道を愛でし友逝きぼけの花  
鬼やんま時を止めてホバリング  
児の命助けし漢初夏の島  
寒空や初投票の子の背中  
木枯や妻と歩みし八十の坂

「狐火」

藤原 壽（壽子）

大股でヒツプアップやいぬふぐり  
能書は読まず手の出るさくらんぼ  
新緑やゆれるピアスの風の唄  
半ドンの青春の日や夏の雲  
蝙蝠の四十五度の闘志かな  
秋晴や柔軟剤をかへて干す  
狐火やあれは前世の私です  
木枯らしやチャペルのドアの開いている

長旅の八十路を越えて春を待つ  
花吹雪友と詩吟を詠ひけり  
みぎひだり螢飛び交ふ吉野山  
江の島や渚に妻の日傘見ゆ  
川原の夕日に映ゆる芒かな  
柿落ちて夢を破るやトタン屋根  
夕日背に買ひ物に行く冬帽子  
湯豆腐や仏と少しグラス酒

「大欠伸」

前田道人（道紀）

大江戸に暁の疾走初荷札  
生あるを確かめてゐる賀客かな  
言うなれば鼻毛くすぐる寒さかな  
出刃一閃鱗は刻を樂しまず  
恋猫や「玉三郎」に今朝の傷  
吊り忍母の育てし苦を足す  
神の留守古刹の猫の大あくび  
晦日蕎麦今年は母の席の空く

「年惜む」

磯田烏城（貞二）

共白髪歩みし妻と年惜む

二度童女吟声清し年惜む

独り居の庭に一輪寒椿

寒椿八重をくずさずつくばいに  
扱ても卒寿超え来て初春何思ふ

木の間にも必死に動く冬の鳥

何度でも気を取り直し寒椿

これよりの短い未来盆の月

（読売）

（読売）

（読売）

「庭の木」

岩崎泰俊（泰俊）

庭の木に朝日の映えて春近し

いつも会う友の賀状のまた嬉し

青空に冬日の薰る散歩かな

予定とは元気が基本春近し

お互に加齢いたはる春の風邪

ときには句を時に目を閉ぢ春の昼

新人のぴちぴち動く四月かな

今年こそ選者に届け微衷の句

（朝日）

（NHK）

（NHK）

（朝日）

## 随想

「真理を求めて」

伊藤しよう

宇宙は開闢以来約一三八億年が経ち、人類が生まれてから数百万年たちました。古代ギリシャ時代には哲学者デモクリトス（前四六〇年頃～前三七〇年頃）らが万物はアトム（原子）で創られてると想像していました。その後文明はどんどん進歩し、万物の真理は徐々に分かつてきました。

しかし、分かつたと思ったとたん、またあらたな疑問が生まれ、なかなか真理は解明されません。例えば、宇宙は何で構成されているかです。現在分かつている物質は、全体の五%程度で、残る九五%は何でできているかは分かつていないうそです。

俳句を始めて似たような感じを持ちました。うまく言い表せなかつた表現を工夫することにより、以前より様になつてきたと思うと、また新たな工夫が求められてくる。これつて、人間の頭の中も、宇宙の広大な空間と同じように、一つ解決するとすぐに次の疑問が出てくるという仕組みになつているのかもしれません。

これからは、宇宙の真理の想像と共に、脳みその創造をも続けていきたいと願うところです。

## 自作自詠俳句研修会 実施事項

※ 例会 每月第二火曜日午後二時より（原則として）

- ① 名句鑑賞・解説（当番制）
- ② 自作自詠

- ・自作俳句二句の紹介と一句自詠（独吟）
- ・俳友の感想、先生の句評

- ③ 自選一句（新聞俳壇等）、紹介と選者範吟・合吟
- ④ 翌月の兼題の選定
- ※ 行事 吟行会（原則年二回）、懇親会、その他
- ※ 句誌 「湧水」年一回発行

千代田岳精会自作自詠俳句研修会 役員

参与

鈴木陵人  
磯田烏城  
岩崎泰俊  
菊地龍駿  
徳本じゅんじ

運営委員

顧問 前田道人  
リーダー 橋本千舟  
サブリーダー 細川をさむ  
運営担当 神田つねこ、座間宗萌、伊藤しよう  
伴奏担当 神田つねこ、座間宗萌、近藤まき  
企画担当 鶴飼てるお、塩月凌司、伊藤しよう  
編集担当 細川をさむ、近藤まき  
神田つねこ、座間宗萌